

Epistula

エピストゥラ … epistula,ae,f. 手紙、文章【ラテン語】

vol. 23

2011.4 [Apr.] - 6 [Jun.]

このたびの東北地方太平洋沖地震により被災された方々に謹んでお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興を心よりお祈りいたします。本学では、今回の地震の被害に対する支援として大学生の転入学受け入れや義援金の募集を行っています。

第49回卒業式・第31回専攻科修了式を行いました



3月23日(水)、学生の成長を見守ってきたご家族やご来賓・本学教職員が見守るなか、第49回卒業式・第31回修了式を執り行い、4学科の学生と専攻科生440名が本学を巣立ちました。

中山学長が各学科と専攻科の代表者に卒業・修了証書を手渡し、「自信を持って希望する道を邁進すれば必ず道は開け、周囲を幸せにすることができる」と卒業生・修了生に激励の言葉を贈りました。また、卒業生を代表して松永あおいさん(国際文化学科)が「芸短大で学んだことがきつと糧になり、支えになる」と答辞を述べ、在學生に向けて「芸短で過ごす2年間は『今』しかありません。限られた時だからこそ、一生懸命に大切にしてください」とメッセージを贈りました。

卒業生・修了生の皆さん、ご卒業・修了、誠にありがとうございます。本学は皆さんのご活躍を期待し、今後も応援いたします。

卒業生・修了生の皆さん、ご卒業・修了、誠にありがとうございます。本学は皆さんのご活躍を期待し、今後も応援いたします。

※中山学長の式辞は本学HPに掲載しています。



「吉村正郎展」を見て

吉村正郎先生が染色担当の教授として本学に赴任されたのは1994年。96年に県立芸術会館で開かれた「大分三大学美術教員展」における発表が、大分における初の作品公開となりました。

その時展示された「エアークロス」と題された作品は、繊維が絡み合ってきた薄膜が直径70cmほどの球体を形作っているもので、はかなげな素材感と球という完璧な形の共存が、見る者に不思議な感覚を覚えさせるものでした。

1月12日から1週間、大分市アートプラザで開かれた「吉村正郎展」は、久しぶりに県内で先生の作品を見られる機会となりました。また、70年代からの造形的探求を概観できる貴重な展示でもありました。例えば、裁断された200枚ほどの布を固く縫い合わせて枠状にした作品「フレームクロス」は、身近な存在である布という素材が、鉄の彫刻のような重量感を見せていることに驚かされます。その驚きは、最新作である糸目糊を使った繊細な染色作品にも潜んでいるのです。

今回は3月の退任を記念した展覧会でしたが、先生は今後も大分市内に居を構え、創作活動を続けられるそうです。今後のますますのご活躍をお祈りするとともに、次に作品を拝見する機会がそう遠くないことを念じております。(美術科教授 久保木真人)

吉村先生は、アメリカやヨーロッパはもちろん、チリやオーストラリアなど世界各地の工芸展・ファイバーアート展に招待され、出品を重ねてこられました。また、2005年に日本のテキスタイルに関わる教育研究者たちが立ち上げた日本テキスタイルカウンスルに創立会員として参加し、毎年開催される展覧会「テキスタイルの未来形」にも出品を続けています。



「地域活動フォーラム」を開催しました

2月1日、コンパルホールにおいて第2回「芸短大 地域活動フォーラム」を開催しました。

はじめに、ナラティブ能力プログラムの担当教員である情報コミュニケーション学科長の吉良伸一教授による趣旨説明と同学科高橋雅也講師によるアメリカでの視察を報告し、その後、学生による活動発表を行いました。内容は平成22年度で主に取り組んだ7項目くあしなが育英会、府内学生ECOフェスタ、竹田食育ツーリズム研修、SAEMON23、大分七夕まつり、長湯温泉日韓短編映画祭、環境活動(上野の森の会・上野の森アートフェスティバル・キャンドルナイト)です。

パワーポイントのほか、自分たちで撮影・編集した動画なども駆使して、活動の現場で感じ、学びとったことや今後の課題などを発表しました。本学からは約150名の学生教員が参加。また、高校生や学生の活動を支えるコミュニティパートナーの皆様、保護者の方々にもご出席いただきました。最後の総評および評価会議では、委員の方々から励みになるご意見を数多くいただきました。地域活動を意義深いものにするためには、振り返りが不可欠。このフォーラムから何を学んだかを明確にして、今後とも取り組んでいきます。



無事、帰国しました—ニュージーランド語学研修

ニュージーランド・クライストチャーチ市で短期語学研修に参加し、2月22日の大規模地震に遭遇した本学学生14名が、本学より派遣された教員2名とともに3月3日、全員無事に帰国しました。学生の避難および帰国に尽力していただいた現地関係者の方々に感謝すると同時に、被災地の復興を祈念しております。今回の研修に参加した学生の声を紹介します。

ニュージーランドでの地震を振り返り、まずは無事に帰ってこれたことに安堵しています。地震が起きた時、立つのがやっとで、その後も足が震えていたことを覚えています。地震の現場で見た被害状況は甚大なものでした。余震も続き不安や恐怖がある中で現地の方の協力でその後の生活を安心して送ることが出来ました。現地の方々にとって大変な事態でありながら、私たちへの温かい配慮に感謝しています。(国際文化学科1年 黒木彩)

一言であらわすと怒涛の実習でした。地震によりほとんど授業を受けられなかったけれど学んだことは多いと思います。学校に行かなかった分ホストファミリーと一緒に過ごす時間は多少あり、色々な話をすることができ短い間だったけれど別れるのが寂しかったです。また、不安な中ほとんどの時間を共に過ごした十数名の仲間とは強い絆が生まれたと思います。(国際文化学科1年 長岡美月)



創立50周年を迎えます!

50

大分県立芸術文化短期大学
創立50周年記念

1961(昭和36)年に「大分県立芸術短期大学」が発足してから、2011(平成23)年4月1日で創立50周年を迎えます。本学では創立50周年を祝うとともに、本学が50年間に果たしてきた役割を振り返り、かつ、これからも挑戦する姿を県民に伝えていきたいと「創立50周年記念プロジェクト」と題し、様々なイベントを企画しております。

創立50周年プロジェクトスタートと位置付け、4月6日(水)~12日(火)に、iichiko総合文化センター iichikoアトリウムプラザで「創立50周年記念・大分県立芸術文化短期大学と中国・江漢大学との美術作品合同展」を開催します。これは本学の創立50周年と、交流協定を結んでいる中国・江漢大学の4校合併10周年を祝して開催し、両大学から選ばれた優秀作品各30点をパネル形式で展示する合同展です。開催初日の6日には、テープカットを行うほか、合同展の表彰式もあわせて行います。そのほかの創立50周年記念プロジェクトの主要イベントについては、4面をご覧ください。



授業料振替のお知らせ

前期授業料の振替は下記の日程で行いますので、前日までに指定口座にご入金をお願いします。

※金額195,000円 振替日2年生:4/27(水)・1年生:5/27(金)

News 4

芸文短大 学科ニュース

美術科

▶商品パッケージデザインを九州乳業と共同開発！

九州乳業から商品のパッケージデザイン開発の依頼を受け、専攻科造形専攻ビジュアルデザインコース1年の学生が取り組みました。学生が多くのデザイン案を出しながら、九州乳業の開発担当者と検討を重ね、最終的に日高由夏子さんのデザインに決定しました。デザインは全体がランドセル形をしたユニークなもので、フタを開けると四コマ漫画が描かれているという楽しい仕掛けもあります。漫画の作者は日高さん、小野智子さん、清水志保さんの3人で、ここでも若い学生の感覚が活かされています。



▶音楽科コンサートシリーズ No.54 声楽コース演奏会 ～声の饗宴～

今年から始まった、コース別演奏会の3回目として行われた声楽コースの演奏会は、モーツァルト作曲 歌劇「コシ・ファン・トゥッテ」、独唱4曲、佐藤真作曲の合唱のためのカンタータ「土の歌」といったプログラムで行われました。オペラの舞台の楽しさ、独唱の芸術的な表現力、合唱の圧倒的な声の力など、まさに声と歌の魅力満載の今までにない演奏会となりました。特にオペラでの学生の熱演、独唱に取り組みひたむきな姿勢、合唱の学生ならではの若いエネルギーは、大勢の聴衆を魅了しました。



音楽科

国際文化学科

▶国際文化学科の学生がフランス語学研修に出発しました

国際文化学科の1年生4名と2年生1名の計5名の学生が、1か月間の予定（2月18日～3月22日）で、海外語学研修のために福岡空港から出発しました。研修先は、フランス東南部のアルプスの麓のシャンペリー市あるサヴォワ大学附属語学学校です。

一面の雪景色は、九州出身の学生たちにとっては新鮮なものだったようです。午前中の語学研修に加えて、午後はリュージュなどの課外活動、週末のイタリアやスイスへの遠足など、充実したプログラムが組まれています。短い期間ですが、時間を有効につかって、言葉や異文化を思う存分、吸収してきてほしいと思います。



▶情コミ学生と青年会議所のコラボ劇「こどもに伝えたい！～思いやりの心、人の痛みを理解する心の大切さ～」

2月19日大分県教育会館で、情コミュ学科生と大分青年会議所の方々が協力して劇をしました。「ライオンとねずみ」と「角を失った鬼の兵六」の劇とペットボトルで作った操り人形の実演でした。「地域社会特講」で講演をいただいている「ひとり劇じゅんこ」の福原順子先生にご指導をいただきました。

舞台の背景や人形の製作など準備に大忙しでしたが、さらに演技にも磨きをかけました。青年会議所の方々と学生の息を合わせた演技で、子ども達のたくさんの笑顔が会場にあふれました。あたたかい心が伝わった瞬間が確かにそこにありました。



情報コミュニケーション学科

学長コラム

中山 欽吾

「2つの地震に想う」

ニュージーランド語学研修に参加した本学の学生達が、クライストチャーチを襲った大地震に遭遇したのはついこの間のことでした。ところが、この惨禍からまだ間もない3月11日に東北地方の広い範囲で起こった巨大地震は、その規模においても罹災範囲においても比較にならないほど大きく「天災は忘れた頃にやってくる」ということわざ通りの、想像を絶する巨大津波が、海岸に面した多くの町を根こそぎ押し流してしまいました。実は私が30歳代の後半、青森県八戸市で6年間過ごしましたが、美しいリアス式海岸の幾つかの町は訪れたことがあるだけに、ショックは大きいものがあります。

テレビの報道を見て、ふと「稲むら（叢）の火」という話を思い出しました。これは、今の和歌山県広川町で江戸時代にあった実話です。高台にある自宅にいた庄屋の濱口儀兵衛（1820-85）が、地震の後に海水が沖に後退するのを発見して大津波を予見し、収穫したばかりの稲の束に

火をつけたのです。その火事を見た住民が高台に駆けつけた直後に大津波がきて、全員の命が救われたというお話です。この話はラフカディオ・ハーンによって紹介され、世界的にも有名になりました。津波は英語でも「TSUNAMI」なのは、このためだと言われています。

その後、儀兵衛は大変な努力をして住民と一緒に大堤防を作ります。これは被災者に仕事を与えることで救済になったばかりでなく、1946年に発生した昭和の南海地震津波でも立派に役目を果たしたのだそうです。

しかし、今回はかつてのチリ地震津波の教訓から作られた防波堤をも遙かに超す、千年に一度という大地震だったことが明暗を分けたのでしょうか。大自然の力は、時にこのような人知を越えた災害をもたらすという、教訓と言うにはあまりにも大きな爪痕を残して去っていきました。犠牲者に合掌。



似顔絵／小野 智子 (専攻科 造形専攻1年)

連載

美術科 美術専攻2年 福島 壮太

世界一周旅行について

こんにちは。美術科の福島壮太です。第二回及び、最終回になりました僕の世界一周をして感じた話をつたない文章でお送りします。

突然ですがみなさんは「先進国」と「発展途上国」と聞いて、どちらがいい国だとおもいますか？

僕は先進国が好きです。日本に生まれてよかったと思うこともしばしばです。日本ではほとんどの人が三食おいしいご飯を食べられます。大学まで行って学べる人はたくさんいるし、家に帰ればたくさんのもので溢れています。もし何か足りないのであれば街に行けばすぐに手に入ります。しかしそんなに物で満たされている生活に満足している人はそれ程多くはないのではないのでしょうか。他の人より良いものを、他の人よりも良い生活を、・・・よりも収入を、・・・よりも成績を。よりもよりの連続。

秀でているものには価値を見いだせず物だけ溢れた社会を本当にあなたが望んだのでしょうか。それが先進国です。

僕は発展途上国が好きです。とくにニカラグアが好きです。ニカラグアはとてもとても貧しい国です。三食どころか日本に比べたら質素な食事。大学なんて夢の場所。家がない人もいました。でもニカラグアは貧しいからこそ、足りないからこそ、人々が助け合い、やさしさや笑顔で溢れていました。僕らがその国を訪れたときには、国をあげてお祭りを開いてくれました。（オルテガ大統領も来てくれました）

しかしながら、ニカラグアでは物がないせいでも人が死んでいます。災害が起これば先進国と比べものにならないくらい、人が死んでいます。それが発展途上国です。

先進国も発展途上国もどちらも良い国です。しかしその肯定と同じくらいに否定もできると僕は思います。

僕らの望む「いい国」は価値観や物に人が塗りつぶされ、人

らしさが減ってしまった国でもなければ、貧しさに家族や友達が奪われる国でもないのです。現在世界は、お互いの良いところと悪いところをきちんと理解しなければならぬときに直面しています。

ある人は言います「先進国の大企業が国に来たせいで職を失った」と。

ある人は言います「人との繋がりが希薄になった」と。

ある人は言います「お金があればあの子は死ななかった」と。本当に「いい国」とは、そして「いい世界」とはなんなのか。そんなことを考えながら今日も僕は絵筆を握っているのです。



第49回卒業・修了制作展／美術科

2月15日から20日まで、大分県立芸術会館で、美術科の卒業・修了の作品展を開催しました。

音楽と美術の芸術系2学科は今年創立以来半世紀、節目の年です。

美術科では新しい先生を迎え新設されたプロダクトデザインの学生による家具の作品も加わり、商業ポスターやCGアニメ作品のビジュアルデザイン、食器からオブジェ作品までの陶芸、染めと織りで平面や立体、オブジェをインスタレーションする染織、日本画、油彩画、ミクストメディアの絵画、立体作品、人体塑像の彫刻、など、各コースで2年間学んだ学生の卒業制作、そしてさらに専攻科で2年間、制作に励んだ修了作品を展示し、多くの観覧者の方々に御覧いただき高い評価をいただきました。

今年も各コースの優秀作品を大学が買上げ、約40年間のコレクション、340点余の収蔵作品に、新たに加えられました。

今年7月から、本学創立50周年記念展として、それら新旧の作品の一部が大分空港ロビーの展示を皮切りに、芸文短大竹田キャンパス、中津市の小幡記念図書館、日田市のバトリア日田等、県内各地を巡回し、11月には県立芸術会館2・3室で、美術科歴代と現職の教官作品の展示が予定されています。



第49回卒業演奏会・第27回専攻科修了演奏会／音楽科

3月21日に第49回卒業演奏会、3月22日に第27回専攻科修了演奏会を、iichiko音の泉ホールで開催しました。卒業演奏会は15名、終了演奏会は10名の声楽・ピアノ・管弦打それぞれ各コースから選抜された学生が出演しました。一人ひとりの2年間の学修の成果、音楽的成長のすべてを披露する、その一夜限りの演奏は、演奏者の想いと、その想いを聞こうとする聴衆によって、独特の熱気に包まれた演奏会になりました。

また理論コースの卒業研究及び専攻科修了研究発表が2月15日に行われ、卒業研究9名、修了研究1名が、長い時間をかけたそれぞれの研究テーマに基づく熱のこもった発表を行いました。

3月3日には作曲コース3名による卒業作品の演奏発表が学内小ホールで行われ、ピアノソロや、異なった編成やスタイルの作品が演奏されました。



▲第49回卒業演奏会

▲第27回専攻科修了演奏会

2年間の集大成 — 卒業研究発表会／国際文化学科



平成22年度「国際文化学科卒業研究発表会」を2月7、8日に行いました。「スペインの巡礼」「大分の石橋について」「地球社会における捕鯨問題に関する研究」「ポスターにみる企業戦略」「World Heritage Sites in U.S.A.」「川端康成『雪国』における女性について」など、発表の内容は、学際性ゆたかな国際文化学科の特徴を反映して、非常に多岐にわたるものでした。2年生は、自分たちで選んだテーマを1年かけ深め、必死の思いで論文へと結実させた成果の集大成ということもあって、幾分、緊張した面持ちでした。しかし、発表が終わった後には、達成感と解放感から、みんな充実した笑顔を見せていました。当日は、中山学長や鈴木教務学生副部長にも聴講していただき、貴重な意見をもらうことができました。

内容は、学際性ゆたかな国際文化学科の特徴を反映して、非常に多岐にわたるものでした。2年生は、自分たちで選んだテーマを1年かけ深め、必死の思いで論文へと結実させた成果の集大成ということもあって、幾分、緊張した面持ちでした。しかし、発表が終わった後には、達成感と解放感から、みんな充実した笑顔を見せていました。当日は、中山学長や鈴木教務学生副部長にも聴講していただき、貴重な意見をもらうことができました。

学科全員参加！卒研究発表会／情報コミュニケーション学科

情報コミュニケーション学科は、2月7、8日の2日間にわたって、13のゼミ生が、1年間の研究成果を発表。4月入学予定の高校生も20名以上参加し、全学科生が大講義室に集まり、時には鋭い質問を投げかけました。メディア・情報科学・心理・社会の4領域にわたって、136名の2年生が、76のテーマを掲げ、パソコン、インターネット、DVDを使って研究内容を分かりやすく解説、高校生からも「自分は十分に恵まれていることを自覚し、親にも感謝すべきだと思いました(教育学)」「心理学に興味がわきました」「日本の接客はしっかりしてるんだなと改めて思いました(社会)」「Happyということがとても伝わってきて、見ていて楽しい気分になった(メディア)」等の感想が寄せられました。

4つの領域それぞれの専門知識を単に足し合わせるのではなく、相互に掛け合わせることで、コミュニケーション能力を高め、より良い社会を構築する人材を育成することを目標の一つとして掲げる学科の特徴を様々な角度から示すことができた発表会。在学中に積極的に社会と関わった学生の研究が高校生から高い関心を集めていました。



竹田キャンパス

竹田市で「演劇」「オペラ」公演



2月20日、本学と竹田市の共催で、共通教育課目「創作表現」の履修者と音楽科声楽コースの学生による「ラファエロ」「コシ・ファン・トゥッテ」の公演が、100名近くの市民を集め、竹田市文化会館で実施されました。演劇には地元の小学生6名も出演者として参加、ジャグリング・サークルの妙技も交えての公演は「演劇もオペラも初めてでしたが、とても楽しく観賞させていただきました(30代女性)」「多くの竹田市民に見ていただきたい(50代女性)」といった温かい声援をいただきました。

学生6名も出演者として参加、ジャグリング・サークルの妙技も交えての公演は「演劇もオペラも初めてでしたが、とても楽しく観賞させていただきました(30代女性)」「多くの竹田市民に見ていただきたい(50代女性)」といった温かい声援をいただきました。

オペラハイライト「コシ・ファン・トゥッテ」

今回私は、職員として学生たちを見守り業務に携わってきた。音楽稽古や演技練習、衣装の制作から舞台進行等、学生たちは自発的に行ってきた。本番までにこれらが全てスムーズにいったわけではない。音楽をする上で、あるいは準備の段階での意見の対立。多忙な中体調を崩す者もいた。オペラの本番はおよそ1時間程度だが、そのわずかな時間に費やしてきた膨大な練習量、努力や葛藤の日々。華やかな舞台裏を知るだけに、私は終幕のカーテンコールを涙無しでは見る事が出来なかった。



本番は、照明やプロジェクターを駆使し、字幕を投影。まるで、舞台上で1本の映画を上映している感覚だった。自信を持ち堂々と振舞う姿は、「学生」ではなくもはや「役者」であった。このひたむきな姿に、多くの聴衆より温かい拍手と賞賛の声をいただいた。

これからもっと芸文短大コンサートのファン層が増し、遠方からもお客様に来ていただけるような演奏会を、学生・教職員一丸となり作っていきたい。(音楽科副手 後藤明日香)

竹田キャンパス通信

まだ朝晩は冷えますが、ようやく暖かくなり、昼間は日向ぼっこでまったりとできる季節になってまいりました。何はともあれ、この竹田キャンパスもたくさんさんの学生に利用されて1年が経とうとしています。



最近では、2月下旬、3月下旬にグループ展を行う卒業生達が、制作場所として、この竹田キャンパスを利用しております。みんなそれぞれの場所で夜な夜な制作をしているとなんだか学生の時の卒業制作のようで懐かしく、そして楽しい気分になっていきます。やはり制作は一人で引きこもってするのでは無く、みんなに刺激をもらいながら楽しくあるべきだとつくづく感じました。また校長室をギャラリーに改築(写真)しましたので、地域の方々や来客者に学生達の作品をみてもらい、アートを身近に感じてもらえる場所になればと考えております。

竹田も暖かく過ごしやすい季節になってまいりましたので、楽しむ場として、どうぞこの竹田キャンパスを御利用下さい。(美術科非常勤講師 前田亮二)

恩師からのお別れの言葉

美術科 吉村 正郎教授 「これからもよろしく！」



あっという間の、17年間でした。私は本年3月31日付けで芸文短大美術科を定年退職します。いろいろとお世話になり有り難うございました。今、思えば大阪よりここ大分へ赴任し、多くの学生達と創造の時間を共にし、ゆっくりと過ごせたことを幸せであったと感じています。これからまた、新たな道を大好きな温泉に浸かりながら、あれや、これやと考え歩いていきたいと思っています。一度の人生今後どのように展開していくのか？自分でも楽しみにしています。どうぞ、これからも皆様よろしくお祈りします。

「私もゲイタンを卒業」

国際文化学科 鄧 紅教授



▲2009年夏 ゼミ生と湖北省博物館を見学。

1990（平成2）年4月から、私は中国からの自費留学生として九州大学の博士課程に在籍しながら、大分大学で中国語の非常勤講師を勤め始めました。その縁もあってか、博士課程を修了した直後の1995（平成7）年9月1日、芸文短大の助教授として赴任してきたのです。

ゲイタンで教えて15年、教授に昇任し、国際文化学科のポス(学科長)にもなり、この大分で骨を埋めようかと考えていましたが、なんとこの4月から、北九州市立大学大学院社会システム研究科の教授として赴任することになった！私もゲイタンを卒業するのだ。毎年中国文化研究の卒業ゼミ生を連れて中国へ研修旅行に行くことは、何度行ってもゲイタンでの一番楽しみです。時折、他ゼミ、他学科、教職員（学長も含み）ないし社会人も混じり、みなそれぞれの人生のいい思い出になったと思います。これから人生を一度リセットしますが、ゲイタンでの15年間は永遠に忘れません！（泣）

「長い間、ありがとうございました」



1月24日、30年以上学生食堂を経営して下さっていた阿部さんご夫妻が営業を終了しました。最終営業日には学生や教職員の有志が集まり、簡単なセレモニーを行いました。阿部さんご夫妻と従業員の方々に花束を贈呈したあと、全員で記念写真を撮影。記念写真は後日、プレゼントとともにお渡ししました。

芸文短大 Information



創立50周年記念プロジェクト

大分県立芸術文化短期大学と中国・江漢大学との第1回美術作品合同展

【日時】 4月6日（水）～12日（火）9：00～20：00（最終日16：00まで）
【場所】 iichiko総合文化センター iichikoアトリウムプラザ

アートの風

【日時】 平成23年7月26日（火）～11月13日（日）
【場所】 県下6か所（国東市、中津市、日田市、竹田市、大分市）

記念式典・記念講演

【日時】 平成23年10月1日（土）15：00～17：00
【場所】 iichiko総合文化センター iichikoグランシアタ

第47回定期演奏会

【日時】 平成23年10月10日（月）13：15開場 14：00開演
【場所】 iichiko総合文化センター iichikoグランシアタ

芸文短大地域活動フォーラム

【日時】 平成24年2月1日（水）13：00～17：00
【場所】 コンパルホール（大分市）※予定

オペラガラコンサート

【日時】 平成24年3月2日（金）18：00開場 18：30開演
【場所】 iichiko総合文化センター iichikoグランシアタ

2011. 4【Apr.】▶ 6【Jun.】

平成23年度 学内ギャラリー（前期）スケジュール

1. 『包む』カタチ展
デザイン材料演習 課題作品(ビジュアルデザイン) 4月4日(月)～4月15日(金)
2. 東山紗弓展(デザイン専攻2年) 4月18日(月)～4月29日(金)
3. 柿元咲子展(専攻科造形専攻2年) 5月2日(月)～5月13日(金)
4. 柳野郁子たち展(専攻科造形専攻1年) 5月16日(月)～5月27日(金)
5. 佐々木優季展(専攻科造形専攻1年) 5月30日(月)～6月10日(金)
6. 彫刻演習課題制作展 6月13日(月)～6月24日(金)
7. 中林章史展(美術専攻2年) 6月27日(月)～7月8日(金)
8. 卒業・修了収蔵作品展 7月11日(月)～7月29日(金)

4月から学食が
変わります。

営業時間、メニューなどの詳細は、
学内の掲示等でご確認ください。

※このほか、多数のイベントを用意しています。企画途中のイベントを含むため、都合により日時・場所が変更となる場合があります。

4月 April / 卯月

- 4日[月] 入学式
- 5日[火] 新入生オリエンテーション（～8日）
- 6日[水] 大分県立芸術文化短期大学と中国・江漢大学との第1回美術作品合同展
- 8日[金] 前期授業開始
履修登録（～14日）
- 15日[金] 履修登録変更（～21日）
- 27日[水] 前期授業料納入期限（2年生）
- 29日[金] 昭和の日

5月 May / 皐月

- 3日[火] 憲法記念日
- 4日[水] みどりの日
- 5日[木] こどもの日
- 13日[金] 水曜振替日
- 27日[金] 前期授業料納入期限（1年生）
- 30日[月] 木曜振替日

6月 June / 水無月

- 8日[水] 音楽科コンサートシリーズ
- 19日[日] 父の日
- 22日[水] 夏至
- 29日[水] 音楽科コンサートシリーズ



編集後記 今号のエピストラは、一度死んだはずのヒロインが復活するドライバーの映画『奇跡』にちなんでいます。成人するにつれて、お伽噺のような奇跡など社会にはないんだよ、と教えこまれ、唯々諾々と目の前の現実を受け入れる私たちがいます。でも、厳しい冬のあとに木々が芽生える季節がやってくることも、疑いようもない一つの奇跡ではないでしょうか。悲喜交々の春だからこそ、自然の摂理といったスケールの大きな想像力を働かせてみるにはいいかもしれません。

お詫 前号のエピストラの記事「国際文化学科 学科ニュース」で、佐々岡千波さんの名前を佐々木さんと誤って表記してしまいましたこと、深くお詫びいたします（広報室）

次号のお知らせ

Epistula vol.24は、2011年6月発行予定です